



Inclusion Setagaya 世田谷区手をつなぐ親の会 会報

No.113 発行2018年3月

世田谷で生活し続けるために必要なものは・・・

会長 上原 明子

親の会では11月から12月にかけて5つの地区に分かれ、「障害者地域相談支援センター」と地域の「あんすこやかセンター」（あんすこ）にお願いして、『地域包括ケアシステムの理念と現状』についてお話を聞きました。28年7月から全区に展開されるようになった地域包括ケアについては、昨年28年度の地区会でお話を聞いたかったのですが、時期尚早ということで、29年度に持ち越された活動でした。

あんすこでは高齢者、障害者児、子育て家庭を対象とする相談窓口を設置しているわけですが、紹介された事例で印象に残るのは、高齢者と障害のある子どもが一緒に暮らしている場合の、いわゆる「8050問題」です。

平成29年春に親の会では教育部（学齢期、お子さんが15歳まで）を除く会員1,172人に、「会員（ほとんどが親）の年齢」をお尋ねしました。回答率は74.2%で、870人の会員から返信を頂きました。

90代（6人）、80代（82人）、70代（196人）、60代（216人）、50代（282人）、40代（86人）、30台（2人）となっており、32%以上が70歳を超えていました。

私は会長としてさまざまな施設を訪れる機会がありますが、毎年感じることは、障害の特性や年齢の異なる「子どもたち」をどうやって地域で生活を続けさせられるのか、ということです。会長であるこの10年間に、介護の担い手である親も10歳年を取って体の不調を抱えていたり、片親の家庭になっていたり、また「子ども」もいつの間にか車椅子を利用したり、ヘルメットを着用したり、個々の変化を年々感じます。

平成31年4月に開設される「梅ヶ丘拠点施設」では色濃く地域移行が進められる方針です。原則3年、2年延長も可、障害支援区分が4以上（50歳以上は区分3以上）の人が施設入所支援の利用対象者ですが、地域移行が難しいと思われる高齢障害者は一体どこへ行くのか、心配は尽きません。入所支援施設を一番必要と感じているのは、高齢になった親子の家庭なのではないかと思います。区の梅ヶ丘拠点施設の説明会でお会いした70歳代の会員の方は「親子でずっとこの年になるまで頑張ったのだから、もう手放して梅ヶ丘に託していいのよね」と話していました。

せたがやノーマライゼーションプランの基本理念「障害の有無に関わらず、誰もが住み慣れた地域で自分らしい生活を安心して継続できる社会の実現」を最終的な目標とすることに、心から賛同しますが、障害のある人たちがその軽重に関係なく、世田谷で暮らし続けるためには、地域移行型入所支援施設とは違った機能・・・どこでどのように看取るかということまで考えた施設・・・が必要になってくるのではないのでしょうか。

同時に、GHではなく在宅（自宅やアパートなど）で単身の生活を可能にするとすれば、『寄り添い・みまもり』は欠かせません。

親の会は「横浜市後見的支援事業」を統括している法人をお招きして勉強会を2回開きました。この「後見的支援事業」のような仕組みを、世田谷らしさを加味してどのように作り上げていくか、今後の課題だと思っています。

春の息吹を感じる3月、本人たちを中心にして支援の輪ができることに期待を寄せています。